

僕わかってる

1959
作品ナンバー0023

東京都教育委員会選定

〔推薦〕中央児童福祉審議会 日本PTA全国協議会 国民文化会議 東京都教職員組合 都下大学学生映画連盟 よい映画を薦める会

新東宝系配給

この映画は、東京都地域婦人団体連盟が創立10周年記念事業として、企画した。波多野勤子 の名著『中学生の心理』を原作とし、自我に目覚める反抗期の中学生の心理と行動を描いたものである。



朝、母親が起こしにいてみると一平は、子供部屋の片隅で登山用のスリーピングバッグにおさまってまだ眠っている。顔も洗わずに食卓にやってきて、いきなり食べだす。「不潔ね」と妹のなほ子がいふと不潔な方が抵抗力がつくと言り返す。一平も中学2年の食べざかりとあっては無理もないが、毎月もらうお小遣いは間食のパンに化け、散髪代もみな胃袋におさまってしまった。父親にいわせれば「お母さんは少しかまいすぎる」のだが、理屈ばかりいう一平を黙ってみていられない。一平の目下の悩みは山行きの費用で、妹の家庭教師を買って出る。母親が値切ると一平も教える時間を値切って、平然としている。

待望の山へ登って山頂でくつろぐ一平たちの話は、大人は子供に「もう大人なんだからしっかりしろ」というかと思うと「子供のくせにいうことを聞かない」とか、自分の都合で大人にしたり、子供にしたり、結局俺たちの気持ちなんかわからないんだということになっていく。しかし、一平は反抗する反面、帰宅しても母親の姿が見えないとふくれたり、「妹のスカートを作る暇はあっても、僕のセーターは編む暇はないの」とすねたりする甘えもある。背ばかりのびてアンバランスな体そのままに完全に親から離れてもいないのだ。母親は手を焼いているが、これが中学生の姿ではないだろうか。

劇

16ミリ

白黒／43分

■自主企画

■企画

東京都地域婦人団体連盟

スタッフ

■製作

山高しげり

村山英治

米山 彊

■原作

波多野勤子

■脚本

片岡 薫

■演出

青山通春

■撮影

山根重視

■音楽

草川 啓

■出演

一平： 山本 亘

なほ子： 小森珠子

父三吾： 信 欣三

母みや子：

高杉泰恵子

次郎君： 梶川健雄

泉君： 後藤頼久

中村君： 水谷克彦

他